

妖怪の山を流れ落ちる九天の滝。その裏側の空洞で犬走柊の部隊は待機している。そして任務である哨戒の時間になると持ち場へ移動するのだが…

「柊たいちよー！だーれだ！」

彼女の部下は妖精たちなので待機時間に隙を見つけては悪戯してくるのだ。

「…目を隠してるのはベリーさん、声はリーフさんですか？」

「もー柊隊長千里眼で見たでしょ！！」

「見てないですよ…」

悪戯への対処もお手の物である。

「そんなことより、そろそろ時間ですから持ち場についてくださいよ。」

「はい！」

そんな妖精たちも哨戒の時間になると真面目に自らの任務を行う。悪戯はするが彼女の事を慕っているのだろう。

「あ、犬走さんちょっと手伝ってください！」

「今行きます～」

彼女の任務は哨戒であるが滅多に侵入者など来るものでもない。そのため普段は暇潰しに住人のお悩みなどを聞いて回るので何でも屋のようになっている。

「『本日も異常なし』っと。」

いつも通り報告書に書き待機場へ帰った彼女の元へ慌てた様子で息を切らしながら一人の妖精が駆け込んできた。

「柊隊長！」

「ルリさん、どうしました？」

「文々。新聞の夕刊なんですけど…」

ルリが手渡した新聞には最近起きた異変の記事が書かれていた。

「『弱者のためという名目で下剋上を画策する天邪鬼、幻想郷の崩壊か。』…どうせいつもの誇張記事だとは思いますが警戒するに越したことはないですね。ありがとうございます。」

文々。新聞は誇張された記事が多い、それに幻想郷の崩壊などを画策すれば博麗や賢者が黙っていないだろう。しかし翌朝、そうは言っていない事態となった。

『共に天狗社会で下剋上を。皐月某日、狼煙が上がった時。』

筆で力強く書かれたチラシが郵便受けに投函されていた。

「どなたかこれについて知っている方はいますか？」

妖精たちに聞いて回ったが誰も知らないようで首を横に振るのみだ。もっとも部下の妖精たちがこんなタチの悪い悪戯をすることはないと分かってはいたのだが。

だとするとこのチラシは今回の異変の首謀者の物か、それとも異変に影響された者がいるのか。仮に白狼天狗全員が蜂起すれば双方死者が出るような状況になりかねない。しかし彼女はまた別の事で悩んでいた。

「下剋上…か…」

彼女も普段の膨大な仕事量や無意味な任務、いつも変わらない日々にはうんざりしていた。下剋上も悪くはないなと感じたのだ。普段忠実で真面目な性格の彼女だが、なぜか今回ばかりはすぐに決断することが出来なかった。

「柊～？」

聞きなれた親友の声でふと我に返る。にとりとの将棋中に考え込んでしまっていたようだ。

「あ、すみません！」

「もしかして下剋上の話気にしてるの？」

「まあ…」

にとりはエンジニアという職業柄か情報通であり、今回の話も既に知っていたようだ。

「まあ天狗の縦社会っぷりには柊も辟易してたもんねえ。哨戒任務って言ってもほとんど雑用みたいだし。」

「雑用頼んでくる人大体にとりだけどね…」

「そ、それはさておき、」

将棋を打つ手を止め彼女は柊の顔を見ながら真面目な顔になって言った。

「私は梶の選択なら応援するよ。」
「…ありがとう、にとり」

翌日彼女は部下の妖精を集めた。
「妖怪の山の哨戒天狗、犬走梶。この下剋上には参加しません。しかし妖精の本分は『自由』、あなた方の行動を咎めることはしません。」
彼女は真面目な性格故、自身の役割に忠実だった。「哨戒天狗」ということこそが自身の存在証明であったと言ってもいい。変わってしまうことへの恐怖心と言ってもいいかもしれない。束の間の沈黙の後一人の妖精が口を開いた。
「私は梶隊長についていきます！」
それに応えるように他の妖精も声を上げた。彼女と彼女の部隊は下剋上に参加しないことになった。

そしてある日、狼煙が上がった。彼女はそれを見て一度木刀を手に取ったが少し迷った末真剣に持ち替え外へ飛び出した。蜂起した白狼天狗や妖精は思っていたよりもずっと多い。手加減は出来ないということなのだろう。そうして彼女は同僚たちと対峙した。

天狗の本部まで侵攻されてしまえば確実に死者が出る。その前に食い止める必要があった。
しかし妖怪の山は天狗だけのものではない。逃げ遅れた妖怪が数人、巻き込まれていることに彼女は気づいた。先に避難させないといけない、そう考えた彼女は救助活動を開始したが反乱勢力はお構いなしだった。
「妖精各位避難先の整備を！」
腕の中の妖怪の震えを体で感じつつ彼女は攻撃を防ぎながら救助活動を続けた。何とか周囲の妖怪を避難させ、彼女は怒りに体を震わせ反乱勢力に吐き捨てた。
「何が下剋上だ、今も隠れ震え続けている妖怪たちを捨て置いて何が弱者のためだ！普段の任務で何を視ていたんだ！！」
「妖怪の山の哨戒天狗、犬走梶。参る！」

彼女は白狼天狗の中でも上位の強さを持っている。表情一つ変えず剣を振るう度、反乱勢力の白狼天狗は倒れていく。妖精に指示を出しながら戦い続け、一刻の後には彼女は一切血を流さず鎮圧を完了させていた。反乱勢力の妖精は彼女の部隊に追い立てられどこかへ逃げてしまったようだ。倒れて動かない同僚のそばに座り込み、彼女は呟いた。
「迷いがあるまま真剣を持てば動きが鈍る。」
いくら強いとはいえ白狼天狗十数人を同時に相手取るのは簡単なことではない。それにも関わらず簡単に鎮圧出来たのは、相手に迷いがあったからだろう。そして彼女は一切の迷いを持っていなかった。

「『本日も異常なし』っと。」
彼女はこの件を内密にした。異変の影響で各地の妖怪が狂暴化していたこと、異変の元凶が天邪鬼であること、天邪鬼は博麗が退治したこと、それらを彼女は知っていた。ならば影響を受け反乱を起こした天狗の立場を無くすような報告は必要ないと判断したのだ。

反乱の翌日、いつも通り彼女と妖精たちの訓練が行われていた。
「峰打ちは打つのではなく、斬る直前に刀を返すことで相手に『斬られた』という意識を植え付け、恐怖により気絶させることが目的です。全力で打ってしまっただけは斬るのと変わらないほどの殺傷力がありますから。」
そう部下に説明しながら彼女は木刀を巻藁に振るって見せた。巻藁は完全にひしゃげ、元の形に戻ることはなかった。
「また峰打ちを行う際には相手に峰打ちと悟られないような工夫が必要です。気迫は勿論のこと、別の相手に峰打ちを使っているところを見られないようにすることも効果的です。…ってベリーさん聞いてますか？！」
また『いつもと変わらない日々』が始まっていた。